

——つまらない事に喜び、些細なことに興奮する。全く子供と同じである。この無邪氣な生活が、却つて日本軍をして今日の強さにしたのだ。軍隊は一家族である。部隊長殿は兵隊の父である。一家團欒、軍隊は將に一家團欒である。私が今語らんとする事どもは、讀者の皆様から見たら或は些細な取るに足らぬ事柄かも知れない。しかし若しこの本を讀まれてから始めて入隊する補充兵の方があつたら——成程、森の書いたことに間違ひない——と思はれるでせう。

消燈まではまだ少し時間がある。私は久し振りに針を出して軍衣の修理をやつてゐた。

「上官！」

突然誰れかがさう叫んだ。私はすぐ直立した。班長殿が入つて來られたのである。班長殿に對し敬禮を行つた。

班長殿は何か用事があつて入つて來たらしかつたが、入るや否や

「補充兵は集れ」

と言つた。この時間に何が始まつたのかと、私達は不思議に思つた。すると班長殿は

「これが目に入らぬか！」

と一隅に放り出されてゐる塵取りを指さしたのである。私はハツとした。私だけではあるまい、恐らく補充兵の全部がハツとしたことだらう。班長殿は班内に入るや否や、その不整頓を發見したのである。日頃から特に清潔整頓を厳しく命じられてゐた私達にとつて、塵取りの一個が不用意にも部屋の隅に放り出されてゐたといふことは、何と云つても辯解の餘地はなかつた。私達は頭を垂れて黙つてゐた。

「誰がこゝへ放つて置いたのだ！」

班長殿は非常に怒つてゐるらしかつた。私達は顔を見合せるだけで「私です」と言つて名乗をあげる者はなかつた。

誰かやつたに違ひない。それでゐて誰も私ですといふ者はない。私は兵隊達の

卑怯なのに驚いて、私がしたのですと言はうかとさへ思つた。

「誰もしたものは無いと言ふのか」

班長殿は甲高くさう言つて、私達一同をデロリと見渡した。それでも私がいきました。と言つて出る兵はなかつた。班長殿の顔が歪んだ。手が震へてゐる様に思へた。班長殿は再び何か言はうとした時である。

「班長殿、北野であります」

と突然北野が班長殿の前へ出た。

「さうか、北野か」

班長殿は淋しげに聲を落して、たゞ一語さう言つた。私はハツとして北野の方を向いた。「森がしたのであります」と私が言はうとした刹那、北野が答へてしまつたので、私は張合が抜けたやうな気がしたと同時に、なんとなく安堵の胸を撫で下ろした。

班長殿は黙つてゐた。班長殿の胸の裡には北野が眞當に不注意だつたとは思つ

てゐない。私自身も北野が、責任を負つて出たのだと思つた。

「北野、片付けろ」

北野が塵取りを規定の位置に置いたのを見て、班長殿は

「北野、下士官室まで来い！」

といつて出て行かれた。北野は頭を垂れて班長殿について行つた。私達は言葉もなく班長殿と北野の後姿を見送つた。

暫く茫然としてゐた私は、思ひ直して再び針を持つて軍衣の修理にかゝつたが北野が下士官室で叱られてゐはしないかと案じて、針を持つ手が震へてならなかつた。

やゝあつて北野は歸つて来た。

「どうだつた」

私達は言ひ合せた様に北野の周りに集つてさう聞いた。

「ウン、何でもなかつたよ」

北野は口數少くさう返事したまゝ自分の寢臺の方へ戻つて行つた。私達は北野が班長殿にひどく叱られたので萎れてゐるのだと思つたが、事實はさうではなかつた。

私は縫ひかけの軍衣を机の上に置いて、北野の傍へ行つた。

「叱られたのか？」

「いゝや、叱られなかつたよ。班長殿も俺がやつたのではないと云ふことを知つてをられたらしいんだ」

「さうか」

「誰もしないと云ふことはない。やつたらやつたでよいから、私がやりました。と何故言はんのだらうな……と班長殿は言つて居られた」

北野は別に自分の犠牲的精神を誇るのでもなくさう言ふのだつた。私は北野のさう云ふ言葉が非常に奥床しいものゝやうに思へた、と同時に、酸いも甘いも分つた班長殿を戴いた私達第三内務班の補充兵は幸福だと思つた。

「實は俺もな……、俺がしたと言ふつもりで居つたのだ。それを貴様にさきに言はれてしまつたんで俺はどきまぎしたよ」

私がそんなことを言ふと、北野は意外だと云ふ様な顔付きをした。

手箱を整頓してゐた北野の手が、突嗟に私の手を握つた。私はびつくりした。

強く／＼私の手を握る北野の手の暖味が私の心に導つた。

「お前は信じてくれてゐたのか……」

北野はそれだけ言つて再び私の手を握り握るのだつた。

「さうだ——頑張らう。俺達はあの慈愛深い班長殿に世話焼かせてはならない」

私は北野の肩をポンと叩いた。そして二人で顔を見合せて微笑んだ。もう消燈時間に間がない。他の兵どもはそれ／＼寢臺にもぐつてゐる。早い者は鼾さへかいてゐる……。

夕食の後

日曜日の夕食の時であつた。久し振に、炊事場から密柑が配給された。見るからに美味さうな黄金の密柑である。各班毎に當番が炊事場から持つて來た。三つづつ配給したら少し餘分が出たので、誰に特配など言はずに下士官室の班長殿のところへ持つて行つた。

夕食でも終へて、いつもなら娛樂會でもあるのだが、ぼつ／＼第〇期の檢閲が近づいたので、上官殿達は目の廻る位多忙である。兵器の手入や明日の用意、或は郷里への音信、さう言つたものはすべて午後暇にやつてしまつたので、夕食後はたいして用事がなかつた。幸ひの密柑の配給に舌鼓を打つて御馳走になつてゐた。

密柑の一房／＼に、なんとなく地方にゐた時の事が思ひ出されてなつかしかつた。

た。

「上官！」

突然誰かゞさう叫んだ。私達は密柑の食べかけを机の上に置くや否や立ち上つて入口の上官に敬禮した。上官は班長殿だつた。

班長殿は先程私達が持つて行つた密柑を一つも食べずに抱へて持つて來た。

「どうだ、一つみんなして密柑刺でもやらんか」

班長殿が私達と一緒に遊戯をやらうといふのだ。私達はあまり突然だつたので何んと言つて返事をしてよいか分らなかつた。

「つまり密柑刺といふ奴はだな……針に糸を通して、その密柑に投刺すのだ、うまく刺つたら、その密柑を一定のところまで持つて來るんだ。一定のところへ持つて來たものにはその密柑を進呈する——つてかう言ふんだ。順番にやるからみんなその椅子に順に腰を下ろせ」

班長殿は折角兵達に配給になつた密柑をたとへ一個たりとも食べてはならない

とお思ひになつたのだらう。さりとて配給するには、数が少ない。そこで考へたのがこの抽籤法なのだ。私はさう考へると、何んといふ思慮分別のある班長殿だらうとつくづく感心した。

最初に上等兵殿がやることになつた。それから席順といふことにした。若し上席のものが何れも上手に刺して持つてしまへば當然、下席の私達のところまで廻つて來ないことは已むを得ない結果である。私は密柑は既に戴いたから、この上欲しいとは思はないが、せめて私の順番まで、たとへ一個でもよいから廻つてくれればよいがなアと、獨りで氣をもんでゐた。

腕まくりをした上等兵殿は、毛無垢ぢやらの腕で針を投げて密柑を刺した。うまく針は黄金の密柑に刺さつた。

「ウマイ——」

私達は思はず手を打つた。然し次の瞬間、私達の拍手は見事裏切られ爆笑となつてしまつた。上等兵殿は頗る變妙な表情で密柑の糸を引き上げた。うまく行か

なかつた。密柑はボタリと机の上に落ちた。上等兵殿はしまつたといふ様な顔付きで残念さうに落ちた密柑を眺めてゐた。

次の一等兵殿も失敗である。

「教練する方がよほど樂だ」

一等兵殿は額に汗をかいてゐた。古參兵殿は何れも失敗に終つた。愈々補充兵の番が廻つて來た。さきほどから刺された密柑は相當に名譽の負傷をしてゐる。補充兵の先陣を承つて畠中は靜かに針を持つた。畠中は補充兵の名譽にかけてもとつて見せるなんて言つてゐたが、どこかに期するところがあつたらしい。

「エイッ！」

物々しく氣合をかけて投げた針は見事に密柑の奥深く刺さつた。あまりの大袈裟に私達は思はず吹き出してしまつたが、畠中は至極眞面目である。

畠中は要領よく、靜かにく糸を手繰り始めた。なか／＼鮮かである。

密柑は靜かに揺られながら机を離れた。一同は片唾を飲んで見張つた。

「それ、もう少しだ！」

班長殿が自分のことのように力んでゐる。

密柑は遂に一定のところまで上げられた。畠中は補充兵の名譽にかけてと言つたが、本當に萬丈の氣を吐いたのである。

「畠中は意外の時に、實力を發揮するな——」

班長殿がさう言つたので、みんなは一度にとつと笑つた。畠中は額の汗を拭きながら、その密柑を貫つた。

こんどは私の番である。私は畠中程器用ではないが、要領は既に畠中がしめしてくれたから、その通にやればよいのであるから割合に分がよい。私はきつと上げて見せると針を推し戴いた。

「なんだ、針など推し戴いたつて駄目だぞ」

「はい、さうでもない様であります」

上等兵殿は、私が針を拜んだことが面白かつたとみえて私をからかふのであつ

た。私は今に見ろと言はぬばかりに、自信に満ちた口調で返事をした。

「効能書は後廻しだ、さあ早くやれ」

私は上等兵殿にいはれるまゝに針を投げた。針は私の意中を察してか見ん事眞ん中に刺つた。

私は靜かに糸を手繰り始めた。あはて、はいけない——私は自分自身の心を押へながらそろ／＼、丁度蟻が獲物を引張るやうに手繰つた。私の二つの目玉は黄金の密柑に吸ひついてしまつた。無念無想になつて靜かに糸を手繰つた。密柑は靜かに動いてゐる。戦友達は黙つて私の手と、針に刺つた密柑とを等分に見つめてゐた。

——しまつた。と思ふ拍子に、密柑は無慈悲にもホタリと机の上に落ちてしまつた。折角こゝまで上げたのに、私の顔は妙に歪んだ。眼頭には熱きものさへ泛んで來た。

ワツと爆突が起つた。

私は言葉もなく、次の戦友に針を渡した。かつて私は入隊當時から、班長殿と云ふと、嚴格一點張の人の様に思つてゐた。或は又軍隊そのものが、俗氣を離れて規律一點張の窮屈な場所だと考へたことさへあつた。

私のさうした考へは、入隊してから一日たてば一日たつたで是正されなければならなかつた。なるほど軍隊は嚴格だ。しかしその嚴格も度を越した嚴格ではない。つまり私達が地方にゐた時、あまりにも不秩序の生活をしてゐた爲、急に規律の正しい軍隊生活が嚴格すぎると思はれるのである。軍隊の日常生活に馴れてくるとその嚴格、その規律正しい生活が私達の心を締め、却つて楽しくもある生活となるのである。

班長殿にしたつて或は古參兵殿にしたつてさうである。上官は恐ろしいなどと思つてはならない。一班は班長殿を主班に一家族を形成してゐるのだ。だから班長殿はいはゞ一軒の主人である。主人はこわいものであるが、又慈愛深く見てくれるものだ。私達に手落ちでもない限り、怒られたり、叱られたりすることはな

い。

僅かな密柑でも、かうまで班の一同を和やかにするものだ。それも班長殿の慈愛から出發してゐるのだ。兵營生活の目的の一つに「兵營は苦樂を俱にし死生を同じうする軍人の家族にして……」とある。

兵隊たちは一生懸命になつて密柑遊びに興じてゐる。私は窓の側に腰を下ろして十三日の月を眺めてゐた。まだ春には早い、月は朧にかすんでゐた。私は妙に故郷の事など想ひ出した。

誰かゞ又失敗したのだらう。爆笑がまた起つた。

點呼後、就寢競争があつた。

就寢競争とは文字の如く寢方の競争である。こんなことも戦地へ行くと非常に役にたつのだと班長殿が説明された。

「いゝか、俺が審判をやる。一番最後になつた者には一つお見舞ひするぞ」

班長殿は拳骨を擧げてさう云つた。

「用意——始め」

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

みんな同じやうに挨拶して自分の寢臺の前に走つて行つた。軍衣を脱ぎ、軍袴を脱ぐ、恰も機械のやうに古參兵殿たちは早い。私達補充兵がぐづくしてゐる間にもう寢臺の中にもぐり込んでゐる。

「よく眠るんだぞ、そして明日から又一週間、懸命に頑張るのだ」

班長殿は各自の寢臺の前を往き來してゐる。私は暖い毛布の中で班長殿に手を合せた。

「何んと云ふやさしい班長殿であらう。私達は何んと云ふ幸福であらう——」
「ゆつくり休めよ——」

言葉を残して班長殿は出て行かれた。途端に電燈がバツと消えた。私は心の中

で再び繰り返した。

——班長殿おやすみなさい——。

兵營は静かな夜に包まれてゐる。臍にかすんだ月のみが、私達の寢姿を眺めてゐた。

食 事 當 番

私と北野が食事當番のときである。

夕食後、私達は飯上罐を洗ひに炊事場へ行つた。飯上罐とは御飯の入つてゐる罐のことで、地方で言へば御櫃のことである。食事が終ると食事當番はこれを綺麗に洗つておかなければならない。

もう外は眞つ暗である。私と北野は話合ひながら、暗い營庭を横切つて炊事場まで行つた。洗場は既に各班の當番で、つばいだつた。みんな一生懸命に飯上罐

を洗つてゐる。今は一粒の御飯と雖も無駄にしてはいけぬ。尊いお米だ。農家の方が汗水流して作つてくれたお米だ。上罐の中は綺麗であつた。

私は冷たい水に入れて飯上罐を洗ひながらふと故郷の母のことを思つた。冬になると、あかぎれで難儀をする母の姿を想つた。今頃、お母さんは又あかぎれで難儀をしてゐるのだらう。私は二度も三度もそんなことを考へた。

電燈が一個、ポツンと洗場を照してゐる。兵隊たちは黙々と飯上罐を洗つてゐる。洗ひ終つた兵隊は、それを週番勤務の上等兵殿の検査をうけて、通過したのから順々に歸つて行く。

炊事場から酒保の燈が見える。兵隊がいつぱい入つてゐる。

「森、酒保へ行つてみんか」

何んと思つたか北野が突然私にさう言つた。

「何を買ふんだ」

「葉書を買ひたいと思ふんだが」

「葉書？ 葉書なんて酒保で賣つてゐるか」

「賣つてゐるだらうと思ふよ」

私と北野はこんな會話をしながら、足はいつしか酒保の方へ向いてゐたのであつた。

酒保とは、酒場の様に思へるが、酒場ではない。兵隊さん達の慰安のために菓子やうどんを賣つてゐる場所である。

私も北野も酒保の敷居は一二回またいだ事はあるが、それは日曜日の午後か或は仕事のない時かであつた。それ以外足を入れたことのない酒保である。

私の中隊が、酒保とは大分離れてゐたせいもあるだらう。古參兵隊でさへ滅多に酒保へは行かない様である。

「酒保なんか行つて叱られやあしないかな」

私はそんなことを言ひながらも、酒保といふ言葉に好奇心を感じ遂に酒保の戸を開けてしまつた。

班では今、食事後の班内整頓で忙しいだらう。たとへ一寸でも自分勝手なことをしてよいのだらうか——私は自分で自分の心を叱つて見た。

それでも酒保の敷居を跨いだ時、そこに大勢の兵隊があるのを見て——ちよつとぐらゐ構はないだらう——と心の裡で理窟をつけてみた。

酒保の中は混雑してゐた。机と椅子がいくつもいくつも並べてあつた。その椅子に腰を下ろして、煙草を喫つてゐる兵隊もあれば、甘酒を飲んでゐる兵隊もあつた。

私と北野は、恰度田舎の人が繁華な東京へ出て来たやうに茫然と邊りを眺めてゐた。壁には時事寫眞が何枚も何枚も貼られてゐた。お菓子を賣る前には、兵隊が一行に並んでゐる。順番に賣るのである。

お菓子は小さな袋に入つてゐた。一人一袋づゝである。並んでゐる兵隊さんの手に一袋づゝ渡されていつた。菓子を買った人は椅子に腰を下して食べてゐる。流石に古參兵が多く、一つ星は殆んど見當らない。私と北野はその中で小さく

なつてゐた。何んとなく軍隊とは思へぬ別世界の雰圍氣が流れてゐた。

日用品は夜間は賣らないことを初めて知つた。葉書や切手などは晝間の中に賣るのだと聞かされた。

「仕方がない、甘酒でも飲んで行かうよ」

お菓子を買ったかつたが、順番を待たなければならぬので、己を得ず甘酒を飲むことにした。

「甘酒二杯！」

思ひきつて私は言葉をかけた。白い服を着てゐた甘酒屋さんは無言のまゝ、大きな鍋から甘酒を二杯茶碗についでくれた。

私と北野は素早くそれを飲んで表へ出た。時計を見ると、その間僅かに五分間であつた。

もし誰かに見つかつたら何んと言はうかと迷つた。よせばよかつたときへ思つた。

「飯上罐納めに行つて参りました」

私は班へ入るとさう云つた。班の中には戦友たちの姿は見えなかつた。上等兵殿が一人で銃の手入をしてゐた。私はなんだか自責の念にかられた。

「今までかゝつたのか、補充兵は講堂で學科があるさうだ、早く行け」

私も北野も驚いた。今夜は學科はない筈だと思つてゐたのに、僅かの時間とは言へ、道草を食つてしまつて申し譯ない。あわて、筆記の道具を持つて班を出た。その時、私の眼を射たものは美田候補生の視線だつた。私の脳裡は何か電氣にでもふれた様にびりつと感じられた。

講堂では教官殿が黒板に向つて何やら書いてゐた。私達は靜かに挨拶して後の方に坐り、その講義を聞いてゐた。

まもなく學科が終つた。補充兵の一同はどつとばかりに講堂を出て各班に歸つた。

「森と北野、一寸來い」

班へ歸つた私と北野を見て、美田候補生殿がさう言つた。私達は思はず顔を見合せた。

「さつきお前達はどこへ行つてゐた」

美田候補生殿は——もう分つてゐるぞ——といふ様な顔つきで訊ねた。今更偽りを言つて何になる。軍人は潔く進退を決しなくてはならない。私は咄嗟にさう考へたので、真正直に

「飯上罐を納めてから酒保へ行つて参りました」

「さうか、酒保へ行つて來たか——酒保へ行くことは悪いとは言はんが、今のやうに學科のあるのも知らずにゐるやうでは困る」

候補生殿は、腕を後に組みながら恰も子供に諭すやうに言ふのであつた。私は大變悪いことをした様に悔いた。

「ハイ」

私と北野は素直に答へた。候補生殿は餘り怒りもせず、

「とに角、第一期の検閲もすぐだから、なるべく酒保などへ行かないで勉強するんだな」

「はい」

「分つたら早く點呼準備でもしろ」

かう静かに言はれると却つて妙に濟まないやうな氣がしてならなかつた。班長殿といひ美田候補生殿といひ何んといふ寛大で慈愛深いんだらう。私達はよい上官を得てほんたうに仕合せだ。

入浴の失敗

軍隊には嚴格な反面、また頗る愉快なことも多い。また或時などは大變な失敗をして赤面することも數多くあるのである。

入浴時のことである。私達は定められた時間に入浴場へ行つた。既に先番の兵

隊で満員である。入浴のことは先きに少し述べたやうに記憶するから省くとして私達は全部鉢巻入浴をした。洗場が狭い上に満員なので恰度戦場の様であつた。

私は素早く身體を洗つてしまつて、急いで上つた。脱衣場は満員である。私は自分の軍衣をとるのに苦心した。僅かに他の兵との間から、先づ自分の禪を引張つて急いで締めた。寒いことも寒かつたが、寒いだけではなく、脱衣箱の前にも大勢ゐたから早くしなくては迷惑になると思つたからである。

私は大變な失敗をやつてしまつたのである。肌障りが少し變だとは思つてゐたが、まさか他人の禪を間違へるやうなことはあるまいと思つた。私が無頓着で袴下をはかうとすると、後から素手で私の肩をびたりと叩いた者がある。私は驚いて後を振り返つて見た。私の後には隣の班の兵長殿がニヤ／＼笑つて立つてゐた。

「何んでありますか」

兵長殿は笑つてゐるだけで別に返事もしなかつた。私は何んだか癪に障つてむつとした。

「何故叩かれたか分らんのか」

兵長殿は意味あり氣に私の禪を引張つた。變なことをするなと思ひながら、ふと禪をよく見ると、これはしまつた、私は明かに他人の禪をしめてゐるのだ。私の顔は火が出るほど眞赤になつた。咄嗟にどうしてよいか分らなかつた。

「早く返せよ、俺は眞禪だぞ」

兵長殿はほんたうに禪もしてゐない。私はあわて、禪を外して、

「申譯ありませんでした」

と差出した。なんだか氣まりが悪くて穴があつたら入りたい氣であつた。

「人の禪で角力を取る氣か」

笑ひながら兵長殿は言つたが、その言葉は別に皮肉にも聞えなかつた。兵長殿は怒つてはゐなかつた。

「はい！」

私は素裸で不動の姿勢をとつた。兵長殿の身體には相當こい毛が一つばい生え

てゐた。私は泣きたい位だつた。

「風邪を引くといかん、お前も早く着ろよ」

兵長殿はさう言つて自分でも軍衣を着ながら私にも早く着ろと言ふのである。

傍にゐた兵隊たちはたまり兼ねたやうに聲を出して笑ひ出した。

失敗にもことをかき、他人の禪をしめるなんて何んと言ふ大失敗をやつたのだらう。遺瀨ない心で、私は片隅で自分の禪を締めてゐた。

「でも面白い奴だ！」

兵長殿はさう言つて浴場を出て行つた。私はどうしてよいか分らなかつた。浴場では戦地の話に花が咲いてゐた。私は幾分照れ氣分で

「三班森、入浴を終つて歸ります」

と故意に大聲でさう言つて、入浴看視の班長殿に敬禮して外へ出た。私は逃げるやうにして入浴場を飛び出した。

やつと自分に甦つた私は、今のことを考へると、何んだか可笑くなつて來て獨

り微笑んだが、考へれば考へる程可笑くなつて、遂に大聲で笑つてしまつた。外は暗いので誰が居つても分らないが、もし誰か見てゐる人があつたら森は氣が狂つたしか見えなかつたであらう。

上官の情

英靈詣で

或る日、私達は教官殿に引率されて部隊出身の英靈の永へに神鎮り給ふ護國神社と陸軍墓地に參拜することになつた。

私達の部隊は、明治八年創設されたもので一般には青葉師團と呼ばれ、常に國軍の第一線にたつてゐた。

西南の役から大東亞戦争に至るまで、數々の戦争或は事變に出動して建てられた赫々たる武勳は部隊の歴史の上に燦として輝いてゐるのである。

しかし、私達は、その赫々たる武勳の蔭に幾多の英靈が護國の鬼と化せられてゐることを見逃してはならない。

今日も教官殿に引率されて、この英靈に詣でんとしてゐるのである。前日の雪が解けはじめたので、道路が物凄くぬかつてゐて行進が非常に困難である。私達の綺麗に磨かれた編上靴は、見る／＼うちに泥だらけになつてしまつた。

中央の繁華街も、今は昔の夢で、ネオン等は絶対に見られないのみか、屋根看板までが名譽の應召をしてゐる。戦力増強の上に頼もしい限りだ。

私達は舊正月で賑ふ街の中を通つて、先づ最初に陸軍墓地にお詣りした。墓地は街はづれにあつた。松並木が續いてゐる道が突當るところに一寸した森がある。その森の中に墓地があるのだ。附近には民家は一軒もない。ひっそりとしてゐる。

將棋の駒を並べた様に、同じ様な形をした墓石が何列も何列も美しく整列されてゐた。前日の雪がまだ墓石の上にも、周囲にも一つばい積つてゐた。私達は教官殿の號令で、その墓石に向つてうやく／＼しく最敬禮をした。

「眼を閉ちて、靜かに英靈を頭に泛べて見よ。武運に輝く勇士たちの壯烈なる戦死の様が泛んで来るだらう」

教官殿に言はれて私は心靜かに眼をつむつて見た。しかし、私は心の故か、私の網膜にはこれら勇士の壯烈なる戦死の有様は寫つて來なかつた。たゞ廣い廣い見渡すかぎり、山もなく、川もない大平原に於て今しも突撃が敢行されてゐる、彼我の兵隊が血みどろになつて闘つてゐる。——アッ、一人敵弾にあたつてはつたり倒れた。——無念！ その兵は何か叫ぼうとしてゐる。天皇陛下萬歳を叫んでゐるのだらう。私はハッとした。その兵は私自身なのだ。

私は眼をあげた。すぐ眼の前の墓石の前に誰があげたのかお線香の煙がゆらゆらとあがつてゐた。冬だと言ふのに珍しい温室花が供へられてあつた。

私は靜かに墓石の横を見た。明治三十八年二月七日となつてゐる。日露戦争の勇士であつた。丁度今日が命日なので近親のものが供へたのであらう。私は靜かに靜かに合掌した。

英靈の眠り給ふ陸軍墓地に御詣して、新しき決意に燃えた私達は足を返して護國神社へ參詣するのであつた。

その昔、伊達政宗公が難攻不落を誇つた青葉城のその大手門をくゞつて行くと聽て護國神社の鳥居がある。小高い山の上に祀られてゐる。老木が枝を交へて晝なほ暗く、誠に神々しき極みである。

敷詰めた玉砂利を踏む軍靴の響きは勇ましくも亦壯嚴であつた。

彼の滿洲事變で赫々たる武勳を樹てた多門將軍の胸像が雪の中に嚴然と立つてゐた。事變前まで使用されてゐた、午砲用の舊式な大砲もあつた。珍しいと思ひながら登り切ると、頂上はなかく／＼廣く、しかも綺麗に掃き清められてあつた。

大きな石の鳥居の傍に「皇族下乗」と書いた檜の立札が立てられてあつた。

御社は白木造りである。老杉が神殿の屋根に垂れ下がつてゐる。

私達は社殿の前に整列した。護國の英靈神鎮り給ふ御社である。私達は陸軍墓地に詣でた時の感情とは又變つた想ひを胸に、護國の英靈の御前に敬虔なる祈りを捧げたのである。

を捧げたのである。

幾多の事變に、戦ひに一命を君國に捧げまつた英靈である。聽て私達も戦地へ征く身だ、生還もとより期してはゐない。家を出る時既に死は覺悟してゐた。

天皇陛下の御前に潔く戦死しよう。それこそ私達が公に奉ずる最大の名譽であり、又義務であるのだ。今や戦争は益々擴大されんとしてゐる。米英を徹底的に破摧撃滅しなくてはならない。大東亞十億の民の爲に吾も亦礎石とならん。英靈よ、私達もすぐ後を追つて參ります。どうか私達の働きを御照覽下さい——私は心に誓ひ、心に念じた。あゝ教官殿が言はれた如く、私の網膜には、はつきりと護國の英靈の神姿が映つた。

私のこの胸は高鳴るのだ——。

第一期検閲

私達にとつて、第一期の検閲ほど色々の意味に於て思ひ出の種となつたものも少ない。

入隊してから既に〇ヶ月を夢の様に送つてしまつた。まだ軍隊の軍の字も知らなかつた私達が、どうやら一人前の軍人らしい姿になつて來たのもこの頃であつた。

田舎者のどうにもならぬ若者を、こゝまで教育なされた教官殿を初め班長殿その他の上官殿の御苦心の程が察しられてならない。

近頃では軍隊生活に興味を持つて來たので、一日くが非常に楽しくも愉快である。

第一期の検閲はいはゞ軍隊生活に入つた私達の第一期の試験である。されば如何なることがあつても、この第一期検閲は見事な成績を挙げねばならない。

教官殿を初め上官御一同が吾が事の様的一生懸命御教導下さつてゐるのも、決して無理ではなかつた。教官殿にして見れば、教へ子の第一期の試験である。み

んな好成绩であれと願ふのは尤ものことである。

私達補充兵の第一期検閲は、部隊から十二里離れた王城寺原で行はれることになつた。

往きも歸りも行軍である。往復二十四里の行軍である。私は生れて未だ十二里の道を歩いたことはない。歩くことにかけては多少の自信を持つてゐる私ではあるが、愈々明日出發だと思つた時、私は言ふに言はれぬ焦躁さへ覺えた。晩の點呼が終つてから、いろくの準備をした。背囊へ詰め込む品を檢查したり、編上靴に油を塗つたり、足に豆の出來ない様に靴下に石鹼を塗つたり、一通りのことはした。恰も修學旅行を前日に控へた國民學校の生徒のやうな気分だつた。

私達が部隊を後に行軍に出發したのは翌朝五時であつた。まだ明けやらぬのに中隊の全部は營門の傍に整列して見送つてくれた。相當の強行軍であつたのに、一人の落伍者もなく王城寺の廠舎に入つたのは黄昏時であつた。

見渡す限り茫々たる原である。あそここの丘、ここの岡に雪の塊が残つてゐる。遠く遠く冬山が眼に映つた。あの冬山の峯嶺は私の故郷の山々と連つてゐるところであらう。冬の太陽は長い影を作つてゐる。雪山の裾を拂つて来た風は身を切るやうに冷たい。

かうした中に廠舎は無言のまゝ寒風にさらされて建つてゐた。私達の先輩もみんなこの廠舎に寝起きして、この大平原を縦横に馳驅した實戦さながらの演習をやつたのだ。

私達の一期の檢閲は、なにもこんな遠い演習場まで来なくとも練兵場でも出来たのであつたが、それを莫大な費用をかけて、この廠舎まで来たことは、部隊長殿の親心からであつた。

私達とて、何時までも内地にゐるのではない。必ずや近い日に戦地へ征くのだ。私達は教練こそ激しくやつて来たものゝ、それは言はず、内地の教練であつて實戦場の教練ではない。

部隊長殿はこゝに思ひを致され、何かにつけて不自由な廠舎生活を私達に味はせ、以つて實戦生活の氣分を養はせようとしたのであつた。と、も一つは行軍によつて脚力を試さんとしたのもあつた。

實際、私達の檢閲課目は擲弾筒援護射撃による歩兵の突撃と夜間の歩哨勤務の二課目ではあつたが、行軍そのものも檢閲課目の中に入つてゐた。

廠舎の生活は楽しいものであつた。いや楽しいといふより珍しいものばかりであつた。

寢臺など勿論ない。板敷の床の上に毛布を並べその中にくるまつて寝るのである。軍衣や軍袴はつけたまゝである。こゝには下士官室もなければ食堂もない。私達は配給された饅頭を寝ながら食べた。

班長殿は勿論のこと、中隊長殿でさへ私達兵と一緒に毛布にくるまつて寝るのである。私達は少し早目に就寝した。中隊長殿は明日からの檢閲を前に落伍者があつてはならないと、私達の寝た間を通つては——どうだ靴すれのした者はない

か、とか、足に豆の出来たものはないか——等一人々々見て廻られた。

私達はかうした中隊長殿の心盡しが涙の出る位嬉しかった。中隊長殿は見るからに武骨一點張りの軍人であつた。その中隊長殿が些細なことまで氣を配つて私達の健康を注意して下さるのだ。中隊長殿の情が身に泌みて、毛布を覆つてゐた私の兩眼を熱く濡らした。

「伊東、お前の足に靴すれが出来てゐるぞ、これぢや痛くて行軍も難儀だつたらう」

中隊長殿は隣班の伊東戦友のところを通る時、伊東の足を見てさう云ふのであつた。伊東は何んと言つて返事をしてよいか分らぬので、たゞ「ハイ」と答へるのみであつた。

教官殿が傍から中隊長殿に色々報告してゐた。

「さうか！ 伊東偉いぞ、よく辛棒した。それでこそ日頃の鍛練がものを云ふのだ。然しその我慢、人に後れてはならないといふ責任感立派なものだが、また

明日も明後日も猛烈なる演習がある。もし落伍でもしたらいかん、折角のお前の我慢も水泡だ。早く衛生兵に手當をさせなくてはいかん」

さう言つて中隊長殿は次の兵の方へ行つた。私だけではない。中隊全員がこの温情溢るゝ中隊長殿の情味には感激の涙で毛布を濡らしたことであらう。

毛布の中で私は眠らうとしてもなかく眠られなかつた。

私達の中隊長殿が特別温情深かつたのかも知れないが、必ずしも中隊長ばかりではない。部下を愛する上官の心は、武士道の精華であつて日本軍隊のあるところ必ず見られるものだ。眞の武人といふのであらう。強いばかりが武人ではない。義理や人情を知らぬは武士の風上にも置けぬ——など、浪花節で聞いたことがあつた。上は下を慈しみ、下は又上を敬ふ、そこに日本軍隊の美しきがあり、そこに嚴たる秩序が生れてくるものだ。私達は一兵卒としてこの部隊長のためなら火の中へでも飛び込む用意は出来てゐた。

死は鴻毛より尙軽く、 天皇陛下の御爲、皇國永遠の繁榮の爲、私達の戦友も

私達の先輩もみんな部隊長と、もに敵陣に突入して行つたのだ。

私達の検閲は實戦さながらに展開された。廣い草原を縦横に馳驅して奮闘した。講評は私達の中隊が部隊第一の好成績だとあつた。中隊長殿も教官殿も非常に満足された様であつた。私は検閲が思つたより容易であつたのに寧ろものたりなかつた位であつた。

大隊長殿は

「今日の戦争は、總て科學動員の戦ひである。頑敵米英はその豊富なる資材、軍兵器を頼りに量を以つて我にいどんで來てゐる。しかもその兵器たるや何れも近代科學の粹を蒐め、次から次へと戦地へ送つてゐる。勝利は絶対に日本の勝であるとは誰れも信じてゐるが、油断は禁物である。敵が量で來るなら我も量で行かなくてはならないが、しかしわれらは單に量にばかり頼つてゐるはいけぬ。あくまで敢闘精神を貫かなくてはならない。お前等の今日の演習を見てゐると仲々

よくは出來てはゐるが、いまだ十分とは言へぬ。お前等は戰場へ行つたことがないから無理はないが、今日のお前らの演習をみてゐてつくづく感じたのは、お前らの精神に迫力のないことだ。しかし、お前等が懸命にやつたその精神はよろしい。吾々は常に戰場にあると思ひ一層奮勵努力することこそ、軍人として 天皇陛下に盡す所以である」

と訓示された。幾多の戦争に經驗のある部隊長殿の訓示は、私達補充兵に更に奉公の念を強めさすのであつた。

廠舎の午後

伊藤戦友の家は廠舎近くであつた。だから伊藤にして見れば、生れ故郷で検閲をうけるやうなもので、誠に光榮至極であつた。

既に郷里にいらせてあつたものか、検閲が終つて愈々明日は歸營するんだと云

ふ日の午後、伊藤のお父さんは、草餅をどつきり背負つてこの廠舎を訪れた。面會に來たことが伊藤に知らされると、伊藤は私にも來いといふので、私は遠慮なくついて行つた。

面會所は廠舎隅にあつて周圍は松の木に圍まれ、なか／＼風流だつた。午後だつたので至極閑散で、伊藤のお父さんが一人の女を連れてゐた以外には面會人はなかつた。伊藤は私をお父さんに紹介した。お父さんは幾度も／＼「倅が御世話様になりました」と頭を下げた。

お父さんの持つて來た草餅は素晴しく美味しかつた。新草の香が鼻へついて思はず故郷のことが偲ばれた。伊藤の傍に寄つた婦人がよし子さんであつたことも始めて知つた。伊藤はなか／＼別嬪の妻君を持つてゐるなあとうらやましく思つた。

伊藤のお父さんから頂戴した草餅は、部隊長殿を始め上官殿達に少しづつではあるがお裾分したことは私がこゝに付加へるまでもないことである。

廠舎の生活も終つた。色々思ひ出を残して愈々明日は歸隊するのである。春とは言へこの邊はまだ雪が残つてゐた。

昨日今日の垢を落して歸れと、今宵は珍しくもお風呂を湧かした。廠舎の入浴場は軍隊のと違ひ、薪をくべて沸かすのでなか／＼時間がかゝる。私達は手拭をぶら下げて浴場へ行つて見た。ふだんならとうに沸いてゐるべきなのに、まだ生ぬるかつたので出直してゐることにした。

しかし定められた時間に入らないといつ入れるか分らないので、少々微温いのを我慢すべく再び浴場へ入つた。

お湯は思つたよりぬるい。下の方は殆んど水だ。

「これやたまらんぞ！ 誰か早く沸かす様に怒鳴れよ！」

と言ふ聲がするや否や、裸の身體が水の如き湯槽から飛び出した。

「俺れが行く！」

木村だつた。木村はあまりの冷さに我慢が出來ないので浴槽を飛び出したので

あるが、その途端、

「アッ、隊長殿だ！」

と言つてあはて、後へ下つた。私達は木村の様子が變なので、身を震はせながら窓の傍まで行つて見た。

薄暗い汽罐室に係りの兵隊と話をしてゐる中隊長殿を見たのである。中隊長殿は兵と一緒に湯呂の下へ薪をくべてゐた。勿體ないと思つたので、そのまゝ出ようとする。

「いや出なくともよい。どうだ、まだぬるいか。風邪を引いてはいかん、よく温まらなくてはいかんぞ」

と優しく言はれた。私達はたゞ「ハイ」と答へ、隊長殿のお情けに涙を流さなばかりに思つて再び湯槽に入つた。

ゆるやかに昇る湯氣は、入浴場一ぱいに漲つた。あんなにぬるかつた風呂がやうやく温つたまつて來た。もう黄昏である。浴場の窓からは黄色の山々が遙かに

見えた。

「いゝ隊長殿だなあ！」

誰が言ふとなく、そんな聲が浴場内に聞えた。

洗ふのも忘れて、うつとりと湯槽に浸つてゐた私の身體が、眞赤になつて來た。

大學出の中鉢

陽炎が燃え、梅が綻び始めた。

暖い日が幾日もく續いた。

その頃になると私達の教練もぐつと進んで、もう小隊教練にまで入つてゐた。連日の教練に私達補充兵は愈々張切つてゐた。それにも拘らず、突然、中鉢が病魔に襲はれた。

中鉢の身體は餘程疲勞してゐたらしかつた。私達の眼にもよくそれが判る位で

あつた。それでも中鉢は教練を休むやうなことをしなかつた。

「無理をせんで休んだら好いちやあないか」

休憩の時など私達が言ふと、彼はとんでもないと言ふ様な口調で「俺は倒れるまでやるんだ！」と力んで見せるのだつた。しかしいくら力んでも、その顔には力がなかつた。どことなく沈んだ氣配に私達は心配だつた。

中鉢は私達補充兵中のインテリで彼は帝大出の理學士であつた。私達は彼が學士であるからと言つて特別に尊敬したのでもなければ、又中鉢自身も學士を鼻にかける様なことはなかつた。お互ひに一つ星である。中鉢は非常に長身であつた。

「この身體にもつと肉がつけば申し分がないんだがな——」

など、言つてゐた。私は中鉢とは特に親しかつた。何故といふ理由なく、お互ひに氣が合つた同志とでもいふのだらう。中鉢は獨逸語が得意だつた。よく獨逸語の歌を唄つてゐた。無學な私には獨逸語も英語も區別は出來なかつたが、なんだか可笑くもあれば物珍しくもあつた。

或る日彼は、何んと思つたか

「獨逸語の本を讀みたいなあ」

などと言ふのであつた。彼にして見れば、學園で勉強した獨逸語の原書を讀みたいと思つたのであらう。學者として無理からぬ要求であつたが、私は

「中鉢、それはよした方がよいぞ」

と言つてしまつた。中鉢は變んな顔をして、

「何故、止めた方がよいのだ」

と私に食つてかゝつた。私は悪いことを言つてしまつたと思つた。無學の私が最高學府を出た中鉢に學問上のことを云々する資格がどこにあらう。餘計なお節介を言つてしまつたと後悔したが、後悔先に立たず、私は一寸どきまぎした。

「中鉢、指導物語つて映畫を見たことがあるか」

と私は訊いて見た。私は咄嗟に、郷里にゐる時見た映畫のことを思ひ出したのである。

「いや見たことはないよ、しかしその映畫と俺が獨逸語の本を讀みたいといふことにどんな關聯があるのだ」

「いや大ありだ。恰度、お前と同じ様な大學出の鐵道兵が主役なのだ。その兵隊は洋書が讀みたくて仕方がないので、家からそつと送つて貰つた。ところが、それを班長に見つかつたんだ、——その時その班長は何んと言つたと思ふ？」

「何んと言つたか俺には分らんよ」

「さうか——班長は、靜かにその兵隊の肩に手をやつて「軍隊には洋書以上に勉強しなくてはならんものが澤山ある」と言つたのだ。その兵は暫く黙つて班長の顔を見てゐたが聽て、班長殿分りました。この本は班長殿に御預け致しますと言つたのだ。俺は今お前が獨逸語の本を讀みたいと言つた時、俺の頭の中を隼の如く通り過ぎたものはその映畫の場面だつた。俺の様な無學者の者がお前の様な立派に學問ある者に意見するなんて實際厚顏の至りだ。まあ氣にしないでくれ」

私は一氣にそんなことを言つてしまつた。中鉢は怒るかと思つたら、

「俺もな、お前に言はれるまでもなく、軍隊へ入つてからは何もかも忘れて軍務に精進して來たつもりだ。俺は誰にも負けないつもりで軍務に服して來たつもりだ。大學出の兵隊は弱いと思はれなくなつたからだ。いや、大學を出てゐる様があるまいが同じ。陛下の赤子だ。軍人となつて軍務に精勵するのは當然の義務だ。俺は出来るだけ軍書を讀んだ。だがな、たまには學校で習つた本を讀んで見たいよ」

「いや、俺が悪かつた。俺はそんな意味で言つたのぢやなかつた。さうだ軍務の餘暇に洋書を讀むのもよいだらう。今言つたのは取消にしてくれ」

たとへば私の如き無學者が、勉強する暇に酒保へでも飛んで行きたいと云ふ欲望と、中鉢の如き知識階級が暇があれば本を讀みたいといふ欲望と同じ様なものだ。私達の欲望は誠に下等であるかも知れないが、中鉢のそれは寧ろ上級に屬するものだ。洋書を讀むことが軍務に差支へる様なことになるのなら、それは私が忠告するまでもなく中鉢自身がやらないだらう。私はとんだところで恥をかいて

しまった様な気がした。

二人の仲はそんなにまで親しい仲だった。その中鉢がどうも身體の工合が變んだと言ひ出した。恰度、午前の教練に出る前であつた。中鉢の顔は熱で眞紅になつてゐた。眼は充血してゐて、どこか力がなくなつてゐた。

「大丈夫か、班長殿に言つてやるから休めよ」

と私がすゝめたが、彼は無理に笑つて見せて、

「大丈夫だよ、これしきの事で倒れてどうなるものか」

と言ひながら装具をつけ始めた。

帯剣を着ける彼の手が顫へてゐる様に見えた。装具をつけ終へた中鉢が、教練に出ようと二三歩歩むとばかりと寢臺の上に倒れてしまった。

私達は驚いて中鉢の傍に駆け寄つた。中鉢は毛布の上に手をついて、強いて力を出して立ち上らうとしてゐた。しかしそれも無駄だった。中鉢の額から頬にか

けて脂汗が光つてゐる、呼吸は非常に荒い。

「中鉢、大丈夫か、早く装具をとつて休めよ」

「苦しくないか」

私達は心配して、中鉢の装具をとつてやらうとすると、中鉢はその手を拂ふやうに

「大丈夫だ。俺は死んでも教練はやるんだ」

と力のない聲でさう云ふのだった。

誰が呼びに行つたのか班長殿がやつて來た。

班長殿の姿を見た中鉢は、

「班長殿、中鉢は大丈夫であります。やります、やらせて下さい——」
と起き上らうとしながら、力なく言ふのであつた。

「馬鹿！」

班長殿は何を思つたか大喝した。

「無理をして取り返しのつかぬことになったらどうする。心配せんでもよいから休め！」

班長殿は怒つてゐるのではない。諭してゐるのだ。中鉢は泣いてゐる。自分の腑甲斐なさを泣いてゐるのではない。班長殿の情に泣いてゐるのだ。

私達は黙つて中鉢の装具を解いて静かに寢臺に寝かせてやつた。

翌日も中鉢は教練を休んだ。

「今日は何をやつた？」

私達が教練から歸ると真先に訊くのであつた。餘程教練のことが氣になつたのであらう。私達はその日の教練の模様を話して聞かせると、中鉢は寢臺の中で嬉しさに「ウン／＼」と頷いて見せた。その日は防毒面を着けての教練であつた。着面するととても息苦しく眼硝子がすかして見ると、みんなの顔が變にゆがんで見え、誰だか一寸判断がつかない位であつた。

私達は着面したまま、驅足をやつた。最初のうちは、それ程でもなかつたが、少し驅けると呼吸が出来なくなつて、とても苦しかった。足は自由に動くが、胸は何かに押へつけられてゐる様で、とても驅けづらかつた。それでも皆な隊伍を崩さず驅けた。僅か二百米位の驅足が私には一里も二里も驅けた様に思へた。眼が霞んで來るので、防毒面を外してしまひたい様な氣分に襲はれた。

教官殿も着面してゐる。軍刀を振りながら何か叫んで指揮をしてゐられた。私達は殆んど夢我夢中であつた。教官殿も肩で大きな呼吸をした。

「苦しい時は誰も同じだ。もう少しだ頑張れ」

後の方で班長殿の聲がした。——さうだ苦しい時は誰も同じだ。私は心の中で何回も繰返しながらさう叫んで驅けてゐた。突然、先頭を驅けてゐた大木が石につまづいて倒れた。大木はすぐ起き上らうとしなかつた。教官殿は一寸後を振り向いたが黙つてその儘驅けて行つた。班長殿が一人大木の傍に残つた。

どの位驅けたであらう。止れ！ と言はれ防毒面を外した時、私は生き返つた

様な気がした。私は大きく深呼吸をした。誰の顔も蒼白である。誰も同じ様に深呼吸をしてゐる。

私は中鉢の寢臺の傍で一々語つてやつた。

大木はその名前の如く六尺豊の頑丈な身體の持主だった。その大木が倒れたと聞いて中鉢はとても面白いと言つて子供の様に笑つてゐた。

私は教練に出ても、中鉢が一人班に残つてゐる事を想ふと、何かしら淋しかった。あれ程仲のよい中鉢だ、若し二人が戦場にゐたら、それこそ歌の文句の通り一本の煙草も分けて喫んだことだらう。

中鉢の容態は思はしくなかつた。二三日班内で休養してゐたが、遂に醫務室に入院してしまつた。醫務室は兵舎からかなり離れてゐた。教練が忙しいので見舞に行くことも出来なかつた。さぞ淋しがつてゐるだらう。私はそんなにも考へて見た。しかし次の月例身體検査が醫務室で行はれた。私は一寸の暇を見て中鉢を見舞つた。彼はその時は非常に元氣を回復してゐた。

「讀書を許さたてゐるんでね」

と中鉢は毛布の下から二三冊の本を出して見せた。私はその本を手にとつて見た。あゝ中鉢は典範令を讀んでゐたのだ。彼は私のかつて忠告が身に沁みて、讀めば讀める獨逸語の本も讀まずに、かうして軍書を讀んでゐるのだ。私は眼頭が熱くなつた。私の手は知らぬ間に中鉢の手を固く握つてゐた。

召集解除

軍隊生活にすつかり馴れて自信もつけば興味も覺え、これからが本當の軍人になるんだと思つてゐたのに、突然私達補充兵に召集解除の内命が下つた。

私達はそれを聞いて驚いた。私達は臨時召集で應召したのであつて、當然戦地へ行つて御奉公するつもりで居た。私達は今日まで戦地へ行くことを唯一の望みで教練をやつて來た。その教練も實戦さながらの教練だった。激しい教練だった。

然しその激しい教練も戦地へ征くための下準備だと思つて大過なくやり通した。班長殿から

「今度お前達に解除の内命があつた」

と言はれても、俄かにそれを信ずることは出来なかつた。實に意外のことであつた。私達よりも先に應召になつてゐる兵がまだ隊に残つてゐる。いや私達より先に應召された兵が戦地にある、それなのに、何故私達だけ召集解除になるのだらう。私達は言ひ様のない氣分に誰も聲を上げる者はなかつた。

班長殿は靜かに、そして物柔い顔で私達に言つた。

「お前達は近く召集解除になるんだが、これでお前達の軍務は終つたと思つてはならない。お前達は教育をうけた立派な兵である。解除になつたといふことは幸か不幸か知らないが、近きうちに再びお召があるかも知れない。それまでは、お前達の身體はお前達のものではあるが、天皇陛下のものだと深く認識して身體を十分鍛錬しておかなくてはならない。教官殿はお前達を一人前の兵隊にしたい

が爲に、お前達の眼から見ると随分激しい教練をやつた。班長もお前達から見れば、至らなかつたかも知れないが、やはりお前達を立派な國家の干城としたいと思へばこそ最善をつくしたつもりだ……」

いつになく、しんみりと語る班長殿であつた。私達は、この班長、この教官の熱心なる教育によつて始めて軍人となり、始めて軍隊の味を知つたのだ。

雪の練兵場に、或は砂埃の行軍に、私達はいつも班長殿と一緒にだつた。今、解除の内命に接して、私達は泣きたいやうな氣にかられた。

軍人になれることを念願に育つた私である。第二補充兵となつてその腑甲斐なさに泣いた私である。その補充兵にまで有難いお召があつて、私は一人前の軍人となつたのだ。その私が再び軍服を脱がねばならないのだ。

軍の策戦も方針も私の如きに分らう筈がない。と言つて、他にどし／＼入隊する兵のある中に、私達が解除になつて行く理由がどこにあるのだらう。私はそれが不満でならなかつた。

もし戦地で決死隊に加へられなかつた兵があつたとしたら、その兵はどんなに淋しく腑甲斐なさを感じるだらう——私の今の気持はその兵と同じものである。折角、一人前の軍人となつた、これから眞に御奉公出来るんだ、明日は戦地へ征けるかと心から待つてゐたその戦地へもいけず、再び故郷へ歸るのだ。故郷を出る時、誓つたあの言葉が未だ私の頭から消え去らない。男子一度び、敷居を外にして軍隊に入つたのだ。しかも今は大戦争時なのだ。生きては歸らぬと固く誓つた私だ、どの顔して再び故郷の土を踏まれよう。始めて軍服を着せられ、帯剣までして、酒保の裏の松の傍で寫した寫眞を見て「誰が一番先に靖國神社の神となるのだらう」など、笑ひ話の中に固き決意を示したのも今は一片の夢となつてしまつた。

私の心は暗かつた。

解除の日は近づいた。

私達は班長殿と教育助手の上等兵殿を中心にして記念寫眞を撮つた。

「笑つたところを撮らうぢやないか」

と班長殿が言はれたので、みんな笑はふとつとめたが急に笑へるものでもなし妙な顔になつてしまつた。

愈々明日は解除になるといふ晩であつた。

私達は一切の官給品を返納した。なつかしの軍服、兵器、どれ一つとして私の思ひ出の種とならぬものはない。それらを全部返納して、郷里から送つて來た國民服に着換へた。私達のさうした姿を見て古參兵達は、

「すつかり地方人になつたな」

と言つて寂しい淋しい笑を送るのであつた。夕食——これが最後の夕食であるといふので見習士官殿、班長殿も一緒に食事をなされた。

見習士官殿は、食事をとりながら、

「地方に歸つても、軍人であるといふことを忘れずに仕事に勵め、そして模範青年となつてくれ」

と言ふのであつた。私達は名残の食事も胸につかへて満足に咽喉を通らなかつた。

「妻のある者は手を上げ——」

見習士官殿はなんと思つたか急にそんなことを言ふのであつた。補充兵で妻帯者は伊藤と栗原だけであつた。二人は静かに手を上げた。

「獨身の者は先づ女房を貰へ。妻のある者は子供を産め——この次應召でやつてくる時は全員子供のある身で来い」

一同は笑つた。私達は顔を見合せた。

その晩、私は仲々眠られなかつた。最後の寢臺の毛布は温かつた。明日からはこの毛布にも御別れだ。さう考へると何かしら淋しくなつて來た。眠れぬまゝに消燈されて眞暗な天井をじいつと見つめてゐた。暗い中に幾つも幾つも顔が泛んで來た。佐々木の顔であつたり國井の顔であつたり——。

國井は今、何處で戦争してゐるのだらうか。國井の鼻がどこからか聞えて來る

様な氣がした。

佐々木は獨りで天國の旅を續けてゐるのだらう。不寢番の夜の佐々木の姿が泛んで來た。

雨がひそやかに降つて來た。私は殆んどまんじりともしなかつた。起床喇叭が鳴り響いた。

懸念した雨は上り、春の太陽が窓にあかくと輝いてゐた。今朝からはもう軍人ではない地方人だと思ふと何んだか淋しくてならない。いつもなら、起床喇叭と同時に、よし今日も頑張らうと言ふ氣魄に燃えてゐた私であるが、今朝は妙に感情に捉はれてしまつた。私は隣の寢臺の上等兵殿に挨拶した。

「森には随分厄介をかけたな。それなのに俺は何一つ見てやらなかつた。今にして赤面してゐるよ。國へ歸つたらしつかりやるんだね」

上等兵殿はさう言つて私の肩を叩いた。

戦友としてお世話をしてやらなければならぬのに、私は何一つこれと言つて

してやらなかつた。却つて逆に私の總ての面倒を見てくれた上等兵殿だつた。この上等兵殿がゐればこそ私は大過もなく軍務に服せられたのだ。私は涙が出る程嬉しかつた。

部隊長殿の訓示があつた。簡單ではあるが今日の部隊長の訓示は一入身に泌みて感じた。

隊長殿には言はれるまでもなく、今は皇國の重大時である。軍服を着るものばかりが軍人ではない。國民皆兵だ、前線も銃後もない。一億一丸となつて米英を撃滅しなくてはならない。——私は強く／＼その事を心に刻んだ。

朝、九時、暖かい春の陽が上つてゐた。毎日々々この營門を出入りしてゐたのに、今日を限りいつになつたら再びこの營門を入ることが出来るだらう。近いうちに必ず再度のお召があるとは信するものゝ、果して再び懐かしの原隊に入隊出来るであらうか。私はそんなに考へ、二度も三度も營門を振り返つた。

中隊長殿も教官殿も、共に營門の外まで見送つてくれた。私は何度も／＼敬禮した。昨日まで軍服に舉手の禮をしてゐた私達も今日は、その着てゐる服装によつて敬禮も區々である。舉手をする者もあれば帽子をとつてお辭儀をするものもある。皆思ひ思ひに敬禮をした。隊長殿も教官殿も嬉しさうにニコ／＼しながら「しつかりやれよ」
「しつかりやれよ」
と激勵してくれた。

思へば長い月日の様な氣もするし、又短い日々であつた様な氣もする。寒かつた入隊の日のことを思へば、今日は又何んとした暖い春の日和だらう。
なつかしの練兵場には陽炎が燃えてゐた。
遠くなる兵舎を何度も／＼振り返つて見た。

昭和十九年一月十日印刷
昭和十九年一月十五日發行



應召兵

出版會承認イ三二〇二〇七
初版發行部數 八千部

◎定價一圓八十錢

特別行爲五錢
稅相當額

合計 一圓八十五錢

著者 森 伊 佐 雄

發行者 東京都下谷區車坂町八九 鈴木 勝也

印刷所 東京都神田區錦町三ノ二 菅 生 定 祥

東京都下谷區車坂町八九

發行所 大 新 社

電話下谷(83)四七七六七番
振替東京一七一七七七一番
出版會員番號一一六〇九〇

東京都神田區淡路町二ノ九

配給元 日本出版配給株式會社



賣價 (税込) 1.35